

地形地質からみた福岡県の畜産

早川康夫(九州農業試験場)

HAYAKAWA, Y.: The Geological Distribution of Grassland and Cattle in Fukuoka Prefecture

福岡県には中国地方からの延長地質帯が3本きている。(1)環日本海アルカリ岩帯、(2)三郡變成岩帯、(3)石灰岩帯である。

(1)は玄海灘をかすめ、佐賀・長崎県にいたるもので、柱状節理が発達し透水条件の良い玄武岩からなるもので、安定した草原が発達しやすく、昔から玄武岩上の草原に大陸からの輸入牛馬を放牧した歴史をもつ島もあるが、今は畜産利用が廃れた。そうした中であって、大島は村営肉牛牧場をもつ島で、島の西半分の玄武岩塊上の、短草化したササ草原が黒毛和種の放牧地に利用されている。しかし残余は堆積岩よりなり、この部分に造成した草地は消滅し、牧場経営を圧迫している。

(3)は平尾台に代表されるが、里と離れた台上に位置し、カレンフェルドなど石礫が多く、採草利用に不便で畜産に利用されず、専ら観光に供されている。この種の草原は山口県秋吉台など畜産利用があまり活発でないとの共通点が見られる。

(2)の三郡變成岩地帯が福岡県の地質的根幹をなすものだが、堆積岩を源岩とする古い變成岩層に花崗岩、玄武岩などの火成岩を貫入しており、貫入火成岩によって草地定性を大きく変えている。中国地方は地形的特長として、3段の準平原からなるといわれている。そうした地形的特長が(2)に属する福岡県の根幹山地にもみられる。最も明瞭に看取できるのは背振山脈で、100m、500m、800mを標準に凡そ3つの段丘面よりなる。低い方の2段はマサッチ化した貫入花崗岩よりなり、マサッチ化した段丘面上に造成された草地は耐用年限が短い。追播更新を繰返さないと、草地の維持が難かしいが、これに属する公共牧場として油山(低位準平原)、板屋、野呂(中位準平原)が挙げられるが、いずれも導入牧草が株化し消滅した。土地に過大な水分を含む場合の消滅経路である。これに対し最上位準平原に相当する雷山放牧地は、近くに鐘乳洞(石灰岩)があったり、玄武岩転石がみられるなどのことから透水良好で、植生が良好な状態に維持されている。ただし背振山麓に分散発達する福岡県の都市酪農は、せまい敷地で搾乳専業化しており、公共牧場の牧草の良否にかかわらず、育成牛の与託率

が高く、酪農家の公共牧場に対する依存関係は強い。またシラスは永年牧草の耐用年限を短くするが、1年生の飼料作物には影響が小さい。低位準平原に相当する前原町香力に造られた畜産団地は花崗岩の蜜柑丘陵をトウモロコシ畑に変えたが、きゅう肥の多用で良好な生育を示す。しかしシラスは崩壊しやすく、防災に留意する必要がある。直方から田川にかけて三郡山脈に沿う断層線に絡んで、貫入玄武岩の小丘が点在する。この付近は有名な産炭地であり、玄武岩小丘はボタ山にまぎれて目につきにくい。昔から附近農家の草刈場として利用されていたもので、同様のものは中国山地の南麓沿いにもみられた。この地区で貫入玄武岩草地を利用し酪農を営むものとして、飯塚市近くの八木山開拓地、また大将陣山の東裏にみられるが、福智山の山頂部分も玄武岩塊で占められ草原景観を呈し、リクリエーション地として賑わっている。

以上のように福岡県には草地適地が少なく、草生の優れた公共草地も少ない。しかし福岡県は大都市をもち、昔から市乳生産の盛んな県でもあり、儲ける畜産の追求に徹していた県である。畜産の中心地を平野部周辺において効率を高めてきたが、地形的に水田と同じレベルに畜舎を設けているのではない。家畜の保健上、また糞尿処理の都合上やや高い海岸段丘上に置かれることが多い。福岡県の酪農の中心地は、久留米市荒木、善導寺;甘木市馬田、三奈木、捲城;八女市八播;小郡市城山などで、いずれもかつて有明海が内陸深くまで入り込んでいた際の海岸段丘上を占めている。例えば甘木市は戦前桑畑であった段丘上の畑が、かんがい施設の完備で水田となったが、多用途耕地として野菜、花木に混って酪農が営まれている。他に筑後川の河川敷を活用したのが善導寺であるが、氾濫原として下層に砂礫を含み乾燥地としての特性をもっており、遠賀川畔でも同様に活用されている。肉用素牛生産は福岡県では400戸に満たず、ホルンスタイン仔牛の肥育が主体である。それらは多頭飼育の公害を避けるため、さらに奥地に分散配置され、乳牛圏を取りまく分布を示すが、最近九州以外の畜産分布は乳牛を囲み肉牛肥育がこれを取りまく例が多く、福岡県は九州における最初の事例を呈しつつある。